

青丘文庫研究会 月報

No.294

2019年5月1日

青丘文庫研究会 〒657-0064 神戸市灘区山田町 3-1-1 (公財)神戸学生青年センター内

TEL 078-851-2760 FAX 078-821-5878 <http://ksyc.jp/sb/> e-mail hida@ksyc.jp

①在日朝鮮人運動史研究会関西西部会 (代表・飛田雄一)

②朝鮮近現代史研究会 (代表・水野直樹)

郵便振替<00970-0-68837 青丘文庫月報>

年間購読料 3000 円。在日朝鮮人史研究関西西部会会費、5000 円/年 (雑誌 3 冊を入手できます。)

※ 青丘文庫に寄付する図書購入費 (2000 円/年) は 2019 年 4 月より廃止します。

<巻頭エッセイ>

「第一回 済州の歴史と生活文化のフィールドワーク」を終えて

玄善允

年度末ぎりぎりの3月31日の夜遅くに、済州島から帰ってきた。毎度のことながら、心身共にへとへとで、その翌日から寝込んでしまった。しかし、軟弱を絵に書いたような僕としては意外と早く、2日後には起き上がった。10年来のささやかな夢を大過なく終えることができただけでなく、参加者の反応も期待して以上によくて、達成感もひとしおだったからだろう。ともかく、大いに見て・感じて・食べて・飲んで、そして語り合った末に、多くの方は公式日程の3泊4日、そして僕を含めた数名はさらに個々の都合にあわせた済州滞在を堪能し、それからほぼ1月後の今なお、その余韻に浸るばかりか、「事後通信」という形で経験を共有・反芻している。

以下はその旅の報告なのだが、これはあくまで、思い付きを糧に生きている企画者かつ頼りないガイド役だった僕の繰り言にすぎず、他の皆さんには責任などみじんもないことを、念のためにお断わりしておきたい。

さて僕にとって済州は、両親の故郷であるばかりか今なお僕の本籍地でもあるのに、そこには長らく足を踏み入れられなかったし、40歳を過ぎてようやく訪問が可能になってからも60歳頃までは、実際に足を踏み入れるのが甚だ苦痛だった。その理由の最たるものは複雑な家族問題だったが、それに加えて、あの売春とゴルフとがセットになった集団旅行者に対する嫌悪感だった。空港の待合所から機内、そして済州空港に到着してからの入国手続きが終わるまで、浮かれた男たちの競いあうかのような、特に女性職員に対する民族差別感情と性的欲望とが絡み合った言動がいたたまれなかった。

しかも、ある時などは、たまたま空港で会った知人の宿泊先の高級ホテルに同行するためにリムジンに乗り込んだところ、ホテル前では真昼間から着飾った妙齢の女性たちが列をなして、降り立つ集団客を出迎え、客たちはそれぞれが気に入った女性を選び、カップルで部屋に消えていく。さらに夕刻に食事のために外に出てみると、派手な服装と不似合いな仏頂面の女性たちを引き連れた旅行客たちが群れをなして、ホテル周辺の商店や食堂の界隈を、大声で与太話を吹聴しながら闊歩。そんな様子を見ながら僕は、「連れ合いたちの旅の恥はかき捨て」を先刻承知しながらも、怒るところかむしろ、自分の領分ではない「あっち」でのことだからと、むしろ喜々として送りだしていそうな日本の、或いは在日の奥方たちの心の内に想像を巡らすとといった、なんとも馬鹿げたことに励みながら、湧き上がる憤怒を宥めたものだった。

ところが今や、状況はすっかり変わった。今だにゴルフ客がちらほらでも、群れをなしているわけではないから、集団にまみれた差別意識と優越感が相乗した醜態も見られず、男性客よりも女性客の方が目立つ。それどころか近年では、旅行の目的を4・3の悲劇に焦点化して、「犠牲者の鎮魂のための巡礼の旅」といった奇特な人も少なくないらしい。

僕らの今回の済州への旅は、どちらかと言えば、その後者に近そうな気もするが、そんなことを言えばその種の方々から「一緒にしないでほしい」などとクレームをつけられかねないほどに能天気なものなのだが、それこそがむしろこの旅の特色、「参加者の皆さんに思い存分楽しんでいただく」、これが企画者として最も心を砕いたことだった。

もっとも、公的に募っての団体旅行の企画なのだから、「能書き」らしきものも必須というわけで、済州の生活文化（或いは、その痕跡）の数々を巡りながら同行者たち、さらには現地の人たちと言葉を交わしておおいに楽しみましょう、これが趣旨文の骨子だったが、料理も酒も済州の天賦の風光の恵みのどれ一つとして逸するわけがなく、それが暗黙の了解事項であった。その意味では、僕が友人たちと50歳から60歳までの10年間にわたって年中行事にしていた済州一周サイクリングと重なる部分が少なくない。

天候や辺境の火山島といった自然・地政学的諸条件下における、人々の工夫の数々を現場で体感すること、そして翻って自身の生活現場でそれに類することを、あわよくばその価値の（再）発見を通じて感情や思考を更新することで、より豊かに生き直そうといった、なんとも茫漠かつ大層なス目標まで密かに用意していたのだから、まさに大風呂敷の「眉唾もの」。

さて、「既に何度も行ったことがあるから、済州に関しては何だって承知済み」などと嘯くような方でも、意外とご存知ないことのひとつが、済州島は四方を海に囲まれているのに、古来、水と塩の不足に苦しめられてきたといったなんとも素朴な事実。僕らはそんな「魔訶不思議な自然」の背景と理屈を現場で確認するために、悪条件を克服するための数々の工夫（もしくはその痕跡）を特に見て回った。

今回は済州の北半部（現在の済州市全域）に限定したのだが、湧泉水（雨水が直ちに火山灰地にしみ込んで伏流水となり、その多くが海岸や海中で湧出し、それが長らく済州人の生命水だった）、岩だらけの火山島だから、砂地ではなくて岩場での、湧泉水のせいで沿岸の海水の濃度が低いせいで生産性が著しく低く労力がかかる塩田、海女たちの休息所であるプルトクの、労働と学びと情報交換などの多様な様態と機能、非識字女性を中心にして、個々人の切実な祈りや集団的祭礼の場である（本郷）堂、長期にわたって公的規範であった儒教の顕揚と誇示のための祭礼所である醜祭壇、さらには、村民たちの和合の努力の結実として、対立するはずの二種類の信仰の聖所を集めた総合的な祈りの空間。次いでは、少し色合いが異なりそうだが、4・3時代の城（パルチザンと村民たちを離間させるための戦略村）、旧日本軍の軍事洞窟の類。これまた相当に趣が変わりそうだが、日本の植民地時代の高級官僚の別荘まで保存してある優雅な庭園を備えた食堂、そ

してまた、済州の現況を象徴するなんともお洒落なカフェなど。このように、実に多様な性質の場所群なのだが、少なくともガイド役としての僕の頭の中では、すべてがそれなりに繋がっているつもりなので、それらをまとめて紹介した。

参加者の多様性も特色だった。出自（日本人、在日、中国朝鮮族、韓国で生まれ育った生粋の韓国人）、ステイタス（研究者もいたがむしろ少数派で、その他、実に多様な職種）、そして年齢（20歳から80歳代まで）、居住地（九州筑豊、広島、京阪神、東京、そして韓国の浦項）など。それに女性が多数（7割弱）を占めていたことも、この種の企画としては少し風変わりかもしれない。こんなわけだから、参加目的も多様だったはずで、それをすべて満足させるなんてできるはずもなかったが、その分だけ、異質性、他者性を了解事項として、相互間にそよ風が吹くなど、気楽かつ新鮮な道行きが可能だったのだろう。それにまた、ガイド役の僕的能力不足やミスが目立ったからこそ、皆さんの積極的な協力が引き出されたわけで、まさに怪我の功名！

ところで、この文章を書きながら遅まきに気づいたことなのだが、この企画のコンセプトは、青丘文庫の皆さんの長い長い実践の延長線上で生まれた気配が濃厚である。僕は自分でも気づかないほど深い所まで、その影響を享受しながらこの10年を生きてきたらしい。

端緒は2006年の「済州の日本軍軍事遺跡のフィールドワーク」への参加だった。そして、その2年後には腰を引きながらの「済州学研究もどき」で済州と共に青丘文庫にも通い始めた。そして、10年後の一昨年に『人生の同伴者—ある在日家族の精神史』、昨年には翻訳書『済州歴史紀行』の刊行に、さらにはそれら慎ましい成果の「おすそ分け」を口実に、夢のフィールドワークにまでこぎつけた。しかし実際は、「おすそ分け」などといったものではなく、むしろ僕の方が多様な参加者の言葉、表情などから学ぶ好機に他ならず、当初からそれを目論み、結果的にもそうだった。

最後の段階でだけが人が出ていろんな方にご迷惑をかけたりのハプニングもあったが、参加者からは「是非とも次回も一緒に」などとリップサービス含みの嬉しい感想までいただいた。

これだけの人々が参加してくださったのもまた、青丘文庫のネットワークに多くを負っている。参加者の3割ほどの方は青丘文庫などで頻繁にお会いし、その人たちの縁があるからこそ、遠方からはる

ばる参加してくださった方々も、僕の若かりし頃の友人も、辛い中年期にいろいろとサポートしてくださった方々も、さらにはかつての教え子とも実に久しぶりに時間を共にすることができたし、そしてまたその友人とも興味深い会話を交わすことができた。

さらに言えば、こうした企画の源泉には、僕らのような世代が、60年代から70年代にかけての青春時代に漠然とながら理想としていた何ものかの、はらかな残響の一つのように思える。このフィールドワークの一連の過程も、そこに位置付けて考えてみたくなった。

今なお「事後通信」という形で、個々の経験や感想を共有し、経験の重層化を図っており、そこには

拙文よりもはるかに有益で詳細な情報が満載なので、是非とも公開したいと思っている。

今夏には濟州の知人たちを中核にして有志を集い、今回の参加者なども合流して「大阪の歴史と生活文化のフィールドワーク」、その次には第二回目（濟州の南半部地域）、さらに来年には第三回目（総集編として濟州全域）の構想もある。

関心のある方は、以下のアドレスに簡単な自己紹介を添えて、ご連絡をください。そのついでに、以下のブログにも立ち寄ってくだされば望外の喜びです。

メールアドレス sunyoonhyun@yahoo.co.jp

<http://blog.goo.ne.jp/sunyoonhyun5867kamakiri>
玄善允・在日・濟州・人々・自転車・暮らしと物語、

第392回在日朝鮮人史研究関西部会（2018. 6.10）報告要旨

日韓関係をめぐる主要紙社説：岸内閣（1957～1960年）をどう位置付けるか 梶居佳広

報告者は、これまで日韓条約成立＝国交正常化（1965年）に至る日韓関係をめぐる日本の主要紙（全国紙＋有力地方紙）の論調を調査検討してきたが、今回は岸信介内閣（1957～1960年）における各紙社説・論説を対象とする。岸信介は「反共主義者」ゆえ、韓国との関係改善に積極的であったが、1959年に大きな進展を見せた在日朝鮮人の北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）への帰国運動をめぐると日韓対立もあり、在任中目立った「成果」をあげることはできなかった。では、これらの問題をめぐる日本の全国紙、地方紙の評価、見解はどうであったか。朝鮮人帰国運動も含め検討することにしたい。但し1960年時点で12万部以上の地方紙を収集したが、今回の報告では全国紙＝「3大新聞」と当時最も自民党政権に批判的な論調であったとされる『北海道新聞』の4紙に限定しており、収集した新聞全て（さらには未収集の12万部未満の新聞）の論調検討は今後の課題である。

収集・検討で明らかになったのは以下の点である。

第一に、（1960年代と比べても）日韓問題が社説で取り上げられることが少ない。特に帰国運動が表面化する1959年2月までは、日韓会談が5年ぶりに再開（1958年4月）されているにもかかわらず各紙関心が低かった。

第二に、帰国運動については相対的に関心が高い（ただし、北朝鮮への関心は帰国問題にはほぼ限定さ

れる）。そして帰国意思の確認作業の必要性や赤十字国際委員会の仲介の度合いなどで「政治色を薄めようとする」日本側主張に同調しつつも、朝鮮人帰国それ自体は人道的解決として概ね賛同しており、帰国に反対する韓国には終始批判的であった。

第三に、日韓関係については日本人抑留漁船員の問題並びに漁業問題に専ら焦点を絞っている。その上でほぼ一貫して韓国に対し厳しい姿勢を示し続けていた。李承晩ラインを設定して日本漁船を拿捕する。捕えた漁船員には過酷な抑留生活を送らせる。漁船員を「人質」に譲歩を迫る（「人質外交」といったことに強く反発したのであるが、何よりも当時の韓国政府＝李承晩政権は「反日」で「独裁」とする認識が圧倒的であった。なお日本政府に対しても「譲歩につぐ譲歩」「弱腰である」との批判を浴びせているが、日本と韓国・朝鮮との間の「過去」については韓国側の厳しい対日感情に言及する程度であった（この点、『北海道新聞』は李承晩政権の反共的姿勢を「反日」同様に問題視し、日本のかつての植民地支配にも批判的であった）。

結局、李承晩政権が「4月革命（1960年）」で崩壊するまで、日本の各紙社説において日韓関係打開に積極的な主張はほとんどみられなかった。韓国の政変直後に日本も安保闘争が激化し岸内閣は総辞職。日韓の関係正常化は両国とも新たに発足した政権の手に委ねられることになった。（原稿の掲載が

遅くなったことをお詫びいたします。飛田)

●青丘文庫研究会のご案内●

■第401回在日朝鮮人史運動史研究会関西部会

5月12日(日) 午後2時～5時

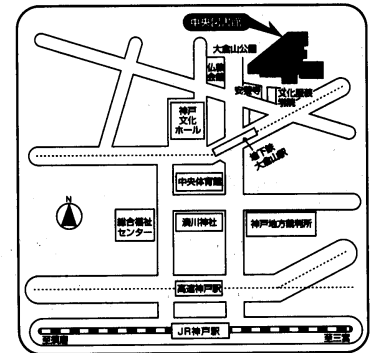
1) 2時～3時半「戦前期大阪における在阪朝鮮人犯罪とその変化—凶悪犯=殺人・強盗/三大犯罪=窃盗・賭博・傷害—日本人との比較を通じて」塚崎昌之

2) 3時半～5時、「424に参加した時のことなど」許用皓

■朝鮮近現代史研究会(休み)

※会場 青丘文庫(神戸市立中央図書館内、TEL 078-371-3351、新館3

階で身分を証明するものだして入館証を受け取り4階会議室にお越しください。)



【今後の研究会の予定】6月9日(日) 在日(岡崎亭子、川口祥子)、近現代史(休み) / 7月14日(日) 在日(佐藤三郎&石塚明子「1969年 神戸商業高校の「一斉糾弾闘争」&その後—教師の立場から(仮題)」)、近現代史(鈴木常勝「台湾老兵の朝鮮戦争」) / ●7月27日(土)～28日(日) 日韓合同研究会、東京、7/27(土) 午後1時～5時(予定)、大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター(CAPP) 7/28(日) フィールドワーク、相模湖、CAPP: 〒106-0041 東京都港区麻布台1-11-5 東京麻布台セミナーハウス、東京メトロ日比谷線「神谷町」駅(一番出口から地上に出て左、道なりにまっすぐ歩いて約5分)、在日朝鮮人史研究関西部会より発表2名、斉藤正樹「在日朝鮮人集落ウトロ・強制立ち退きを克服」、本岡拓哉「戦後、都市の河川敷に住まう在日朝鮮人」 / 8月は休み / 9月8日(日) 在日(キムソニア)、近現代史(姜健栄「むくげの花の少女(高知県)の古里、南原市を訪ねて」) / 10月13日(日) 在日(梶居佳広)、近現代史(未定) / 11月10日(日) 神戸映画資料館で映画上映等 / 12月8日(日) 在日(安岡健一)、近現代史(山根俊郎)

【月報の巻頭エッセイの予定】6月号以降の原稿です。締め切りは20日です。西村寿美子、堀内稔、足立龍枝、石川亮太、鈴木常勝、梶居佳広、高野昭雄、李裕淑、砂上昌一、藤川正夫、張允植、松下佳弘、三宅洋介、金早雪、高希麗、伊地知紀子、川那辺康一、廣瀬陽一、高正子、斎藤正樹、土井浩嗣、上田文夫、中川慎二、塚崎昌之、宇野田尚哉、姜健栄、佐野通夫、三宅美千代、全淑美、太田修、藤永壮、水野直樹、河かおる、本岡拓哉、梁千賀子、山根俊郎、川瀬俊治、小野容照、樋口大祐、梶居佳広、高木伸夫、長志珠絵、藤井幸之助、黒川伊織、吉川絢子、李月順、高祐二、李景珉、青野正明、呉仁濟、勝村誠、松田利彦、飛田雄一(思いっつくままにリストアップしました。前倒しで原稿を書いてもOKです。)

【編集後記】 ■2018年11月号以来の印刷版月報です。それ以外の月はメールニュースを送っています。メールニュース希望の方は飛田雄一 hida@ksyc.jp まで連絡をお願いします。 ■2019年度(2019.4～2020.3)の青丘文庫研究会会費 3000円を郵便振替<00970-0-68837 青丘文庫月報>でお送りください。会員には会員証をお送りします。学生で印刷版の月報の送付が不要と言う方には例外的に会費なしでも会員証を発行します。希望者は飛田 hida@ksyc.jp まで連絡ください。2019年度より青丘文庫への寄贈図書のためのカンパ2000円/年を廃止しました。 ■在日朝鮮人史運動史研究会関西部会会員の方は、年会費5000円をお願いします。雑誌3冊を入手することができます。 ■2018年10月発行の『在日朝鮮人史研究』48号(2592円)を特価2000円+送料180円でお分けしています。上記郵便振替でご送金ください。(飛田)